

2011 年度夏学期 総合科目（国際・地域一般）

「日本・アジア学概論：国際社会で活躍する基盤を身に付ける」

◇講義概要

わが国の国内経済は曲がり角を迎え、多方面で構造改革が叫ばれている。一方で国境の垣根はますます低くなり、世界標準（グローバルスタンダード）が押し寄せてくるとともに、環境問題のように地球全体で取り組むべき課題も山積している。これからは、国際社会で活躍できる人材が求められている。

近年、アジアの成長は目覚ましく、アジアにおける経済、政治、技術、環境など各動向は、国際社会全体を大きく左右する。すなわち、アジアを学ぶことは国際社会で活躍するために不可欠である。

本講義は、本学の「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)」に参画する教員による日本・アジア学の概論と位置づけられる。様々な視点からアジアを切り取る方法論や知識を学ぶことにより、日本・アジア学の魅力を体験し、国際社会で活躍するためにどのような知識・能力・スキルが必要となるのかを理解する。

◇責任教員

古田元夫（総合文化研究科、教授）

◇開講日

2011 年夏学期、火曜日 1 限（9：00－10：30）

◇開講教室

駒場キャンパス 5 号館、533 教室

◇授業のキーワード

アジア、

◇授業の方法

1 回目の「日本・アジア学」の概括的な講義以降は、タイ、インドネシア、ベトナム、中国 4 か国のケースを取り上げ、まず各地で国際プロジェクトや開発、経済発展が引き起こしている具体的な問題を紹介し、それをどのように分析するのか、どのような解決方法がありうるのかを、可能であればグループに分かれて分析、討論する。そののち、これらの国を地域研究の対象としている教員により、こうしたケースの背景にあるそれぞれの社会の歴史的変遷や現在直面している問題を解説する講義を行う。参考書・資料は授業ごとに紹介する。

◇成績評価方法

授業で取り上げる 4 か国のうちから 2 か国を選んで、指定された課題に関するレポートを提出する。これに出席点を加味して成績評価を行う。

教科書・参考書 なし

ガイダンスの有無 特に行わない

履修上の注意 なし

学習上のアドバイス なし

◇講義スケジュール

第 1 回（2011 年 4 月 19 日、火曜日）

「日本・アジア学とは」（羽田正教授、東洋文化研究所）

アジアとはどこのことか？日本はアジアなのか？なぜ、「日本・アジア」が重要なのか？日本・アジアに注目すると、何が見え、何が分かるのか？この講義では、日本・アジア学に関わるこのようないくつかの基本的な問いを立て、それらに答えながら、日本・アジア学が持つ学問的な意味と可能性について説明する。

第 2・3 回（2011 年 4 月 26 日、火曜日・5 月 2 日、月曜日）

「タイ高速道路 BOT 事業における紛争のケース その 1・その 2」（堀井秀之教授、工学系研究科社会基盤学専攻）

国際プロジェクトに関わる事例を取り上げ、ケースメソッドによる学習を通じて、国際プロジェクトに関わる知識、問題分析方法・能力、問題解決策立案方法・能力を習得する。題材としては、1990 年代前半にタイ・バンコクで起こった「第二高速道路」に関わる争議を取り上げる。「第二高速道路（SES）」は、タイ政府と日本の熊谷組との間で締結された BOT 契約事業として計画され、その後 30 年間のコンセッション期間は、熊谷組などによって設立された事業主体 BECL によって建設・運営されることになっていた。ところが、実際に計画が開始されると、建設用地引き渡しの遅延や、契約解釈の齟齬などで BECL とタイ政府との間で争議が発生してしまったのである。両者の交渉は難航し、BECL は自らの立場を譲らず、建設の完了した区間の開業を拒み、タイ政府側はそれに対して複数の閣僚級政治家らが介入して硬軟取り混ぜた駆け引きを行った。また、BECL とタイ政府の間に挟まれる形となった、ETA（BECL の交渉上のカウンターパート）も自らの利益保全という観点から、BECL に対して強硬姿勢を崩さなかった。結局、いずれの争点も解決されることなく数ヶ月の時間が過ぎ、いよいよ事態は行き詰まりの様相を呈していた。

このケースでは、(1) この紛争はどのようなプロセスをたどったのか、(2) 海外の企業が現地（途上国）で事業を行う際にどのようなリスクが存在しているのか、(3) そうしたリスクはどのように避けるべきか、(4) そもそも高速道路事業という公共事業を BOT 事業とすることが適切なのか、といったことを考えながら、(5) どのような解決が可能かを議論する。

＊資料を事前に学生に読んでもらい、グループに分かれて分析・ディスカッションを行う。

第 4 回（2011 年 5 月 10 日、火曜日）

「タイにおける制度の柔構造」（池本幸生教授、東洋文化研究所）

タイ社会は「柔構造」だと言われてきた。実は、制度も「柔構造」であり、人間関係によって大きく左右される。1990 年代前半にタイ・バンコクで起こった「第二高速道路」に関わる争議は、そのことを典型的に示している。BOT 契約事業として始まったものの、実際に運用の段階に移ると、契約は反故にされ、結局、タイ側に都合の良い方向に展開していった。タイ人にとって、契約も法律も憲法さえも絶対的なものではなく、自らの利益に適うように柔軟に変えうるものである。そこがタイの「柔構造」のしたたかさである。

第 5 回（2011 年 5 月 17 日、火曜日）

「インドネシアの環境と開発ーカリマンタンの歴史から学び考える」（井上真教授、農学生命科学研究科）

広大な森と川の世界が広がるカリマンタン（Indonesian Borneo）では、先住民族ダヤック人が焼畑農業、狩猟採集、川での漁労、外部世界との交易によって生計を営んでいた。このような人々の生活と環境は、オランダ植民地時代から独立後しばらくまでは「ゆるやかな市場経済化」を通して徐々に変化していった。そして、1970 年代の「木材革命」および 1980 年代の「合板革命」によって急激な経済発展を経験する一方で、豊富な森林資源も急速に蝕まれていった。1990 年代の造林革命により、人々が森林資源と土地への権利を行使できなくなるという弊害が顕在化し、各地で紛争が生じるようになった。2000 年代前半には地方分権化の効果で人々の森林資源に対する権利が部分的に回復したが、政策の混乱のなかで違法伐採が横行し、カリマンタンは一過的な木材ブームに沸いた。そして、奥地を除くほとんどの森林が劣化した 2000 年代中頃から活発になってきたのが、アブラヤシ農園開発と石炭開発（露天掘り）である。気候変動対策として位置付けられるバイオ燃料原料としての活用も視野に入れたアブラヤシ農園開発は、人々のライフスタイルを決定的に変えることになる。

受講生には政治的パワーが相対的に弱い先住民の立場（生活者の視角）にたって環境や開発の問題を再検討してもらうことになる。このような一種の思考実験を経験することにより、とかく政府や企業の立場（テクノクラートの視角）から諸問題を考えやすいと思われる受講生はバランスのとれた思考、および多角的な思考の重要性を体感するだろう。そ

のため、講義では、各画期における状況を提示し、その状況下で先住民たちがどのような対応をしたのか、また今後どのような対応をするのかを受講生に考えてもらいつつ、歴史の変遷を説明する。

第 6 回（2011 年 5 月 24 日、火曜日）

「インドネシアの資源開発と社会変動・地域社会—スマトラ島を中心に—」（永田淳嗣准教授、総合文化研究科）

インドネシアのスマトラ島中部では、過去 30 年間にアブラヤシ農園部門が急激な拡大をみせ、地域の生態環境を一変させると同時に、地域の社会・経済に深い影響を与えている。しかし同部門の拡大の過程をつぶさに観察すると、インドネシアの政治社会変動や、土地資源の現実的な制約と連動しながら、開発のスタイルを変え、複雑な過程を経て今日の状況に至っていることがわかる。本講義では、インドネシア外島部の資源開発と社会変動に関わる諸問題を、州レベルの空間的範囲を視野に入れながら、地域社会の側に焦点を当てつつ読み解く方法論を提示したい。

第 7 回（2011 年 5 月 31 日、火曜日）

「インドネシア経済の歴史的発展とプランテーション産業」（加納啓良教授、東洋文化研究所）

インドネシアという国家の領土的政治的枠組みとそれを支える経済構造は、19 世紀から 20 世紀の最初の 30 年間に徐々に形づくられた「オランダ領東インド」植民地のもとで、その歴史的前提が築かれた。この時代の経済の主柱となったのは、プランテーション型農業と鉱業による一次産品の輸出であった。第二次大戦後に「オランダ領東インド」が植民地支配を脱して国民国家インドネシアに生まれ変わったのちは経済構造にも変化が生じ、1980 年代半ばまでは石油の輸出と輸入代替工業の成長が、それ以後はジャワを中心に輸出指向工業の成長が大きな役割を演じて、インドネシアは近隣 A S E A N 諸国とともに工業国への転換を遂げた。

しかし、プランテーション型農業が衰えて亡くなったわけではなく、コーヒー、茶、天然ゴムなど伝統的プランテーション産品の生産と輸出は独立後も拡大している。そのうえ 1980 年代以降は、隣国マレーシアの後を追ってアブラヤシの生産がスマトラ、カリマンタンを中心に急増し、それを原料とするパーム油の輸出は近年のインドネシアの経済成長を支える重要な要因のひとつにもなった。本講義ではこのような歴史的経過を、国際経済的な環境変化も含めて整理し説明したい。

第 8・9 回 （2011 年 6 月 7 日、火曜日・6 月 14 日、火曜日）

「ベトナム（ハノイ）の都市開発問題に関するケーススタディの講義 その 1・その 2」（加藤浩徳准教授、工学系研究科社会基盤学専攻）

ハノイ市の中心に位置する旧市街地である **Ancient Quarter** と呼ばれる地域は、ハノイの最も有名な観光スポットであるとともに、古くから商業のまちとして栄えてきた由緒ある場所でもある。歴史的・文化的な価値を持つ特徴ある建築が多数残っており、近年では、外国人が多数訪れ、賑わっている。

ところが、外部訪問者の増加や新たな商業活動の参入によって、交通渋滞が深刻化し、また、既存の歴史的建造物の破壊などの問題も発生している。さらに、この地域は、現在も 100ha に 14,374 世帯、人口約 6 万人が居住しており、世界有数の密集住居地域としても広く知られているが、生活・衛生環境が劣悪で、建築物・設備の劣化が著しいなど、居住者にとっても生活水準が低いことが指摘されている。急激に人口が増加し、経済発展著しいベトナムの首都ハノイの中心商業地として、またハノイ有数の観光地として、さらには地元住民の生活の場として、将来の **Ancient Quarter** をどのように方向付けるのが望ましいのかについては、多くの議論や提案がなされてきているところである。ここでは、JICA が 2007 年に発表した計画調査の内容をもとに、まず、(1)**Ancient Quarter** 地域で発生している問題の構造を整理し、次に(2)多様なステークホルダーの問題構造認識を分析した上で、(3)JICA の提案する解決案を実現するための方策を検討・提案することを目的とする。
*資料を事前に学生に読んでもらい、グループに分かれて分析・ディスカッションを行う。

第 10 回 (2011 年 6 月 21 日、火曜日)「ベトナム社会論—異質の併存と下からのイニシアティヴ」(古田元夫教授、総合文化研究科)

少し前のハノイでは、都市計画による立ち退きを拒否して、大きな道路の進路に立ちふさがる民家を、よく見かけた。社会主義体制をとるベトナムは、「上からの統制」がよくきいた社会と思われがちだが、実際には、「下々の意思」や「下からのイニシアティヴ」が重要は役割を果たしている社会である。ベトナム社会の特徴を「異質の併存」と「下からのイニシアティヴ」という角度から検討する。

第 11・12 回 (2011 年 6 月 28 日、火曜日・7 月 5 日、火曜日)

「途上国における環境汚染とその対策—中国の都市近郊農業を例に—その 1・その 2」(福士謙介准教授、サステイナビリティ学連携研究機構／工学系研究科都市工学専攻)

多くの国はその発展の過程で農業から工業・サービス業への移行を、都市を中心として経験する。工業ははじめ、軽工業が分散的に発展し、その後、重工業が多くは政府や外国による投資で始まる。軽工業の中には比較的環境負荷の低い物から、鍍金、金属加工、薬品、廃棄物処理等の有害物質を環境中に排出する可能性のあるものも多く存在する。資金的問題、有害性に関する認識不足、法の遵守の問題等から環境中に汚染物質が排出される例は少なくない。中国の華北地域は雨量が少なく、田畑への水は河川や地下水では不足し、一度家庭等で使用した水を浄化処理して、あるいは処理しないで使用することがある。家庭で使用した水を田畑に送水する場合、開渠で配水することがほとんどであり、その過程

で多くの汚染物質が流れ込むことがある。前述した分散的に発展した有害物質を出す工場などからも排水が流れ込む。重金属類はその代表的な物である。このような状況で都市周辺のある農地は重金属の蓄積が観察され、農業に影響が出ている。しかし、急速に発展する中国経済は市民の意識も変え、環境の保全、食料の安全に対する意識の高まりはこのような状況を看過しない。本講義では中国天津市周辺における事例を題材に、このような環境汚染、食料生産の問題を考え最終的には華北地域における都市周辺農業の運営を考えていきたい。

第 13 回（7 月 12 日、火曜日）

「中国天津の工業発展史」（丸川知雄教授、社会科学研究所）

第 11 回、第 12 回で天津市の有害な工業排水の問題を取り上げたのを受けて、天津市の工業の歴史について説明する。天津には、戦前には京大出身の企業家により中国を代表する化学メーカーがあり、戦後もその伝統が受け継がれた。中華人民共和国になってから中国のなかで天津のポジションは次第に下がっていったが、1990 年代以降、世界最大の自転車の生産地となり、さらに自動車産業や航空機産業の拠点ともなり、そしてエコシティ建設が進むなどダイナミックに変貌しつつある現状を紹介する。